

1 学校教育目標

地域を愛し、学ぶ意欲に溢れ、国際社会において未来を切り拓く心豊かな児童・生徒を育成する。

・自ら学ぶ人 ・共に生きる人 ・健やかでたくましい人

2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	<ul style="list-style-type: none"> ○確かな学力の定着を図る学校（基礎基本の定着） ○心と体を育てる学校（行事や諸活動を通して心と体力を育成） ○開かれた学校（地域との連携）
○児童・生徒像	<ul style="list-style-type: none"> ○自ら学ぶ人 <ul style="list-style-type: none"> ・常に自らを高めようと努力を惜しまない児童・生徒 ・基本的な学習習慣が身に付いている児童・生徒 ○共に生きる人 <ul style="list-style-type: none"> ・友を大切にし、社会性を身に付け、地域や家庭に感謝の気持ちをもってかかわることのできる児童・生徒 ○健やかでたくましい人 <ul style="list-style-type: none"> ・自らの心と体が常に健康であるように、生活を工夫・改善・向上させることのできる児童・生徒 ・相手の心を思いやることのできる豊かな心をもった児童・生徒
○教師像	<ul style="list-style-type: none"> ○基礎・基本の定着を目指す熱意と指導力のある教師 ○児童・生徒とともに汗を流し、喜びや悲しみを分かち合う教師 ○校長の経営方針の下、組織的に、連携して課題に取り組める教職員

3 学校の現状及び前年度の成果と課題

本校は、小中学校共に入学時から基本的な生活習慣が身に付いており、様々な生活経験を積んでいる児童・生徒が多く在籍している。そのため、落ち着いて学習に取り組める環境が整っている。そのよさを生かしつつ、基礎学力の定着とともに思考力・判断力の育成を図っている。素地は、とてもいいものがあるので小中一貫教育校として「共通行動」を心掛けながら児童・生徒の学力向上に努めている。

2年間続いている新型コロナ禍の中、児童・生徒は落ち着いて学習に取り組んでいる。足立区学力定着度調査の結果では、通過率小学部 85.6%、中学部 77.1%であった。4年間で、学力定着に向け「めあてと振り返りの徹底、中学部の放課後補充学習に全教員がかかわる、56年の教科コンテスト・定期考査の実施」をしてきた。昨年度から始めた56年定期考査及び教科コンテストの実施は、児童の主体的に学ぶ姿勢の育成とともに、教員の意識改革とスキルアップにつながった。今年度もさらに、よりよいものを追求していきたい。

また、若手教員のスキルアップが児童・生徒の学力向上には欠かせない。学年内のOJT研修とともに、月1回のスキルアップ研修や管理職による研修を継続的に実施していく。

4 重点的な取組事項						
	内 容	実施期間（年度） R:令和				
		R2	R3	R4	R5	R6
1	学力向上アクションプラン	○	○	○	○	○
2	不登校児童、生徒の減少	○	○	○	○	○

5 令和4年度の重点目標

重点的な取組事項－1		学力向上アクションプラン							
A 今年度の成果目標		達成基準 (目標通過率)		実施結果 (通過率結果)		コメント・課題		達成度 ◎○△●	
<学力定着度調査> 小学部の通過率昨年度以上 中学部の通過率昨年度以上		令和3年度通過率 小 85.6% 中 77.1%		<4/14 実施：通過率> 小⇒国語 85.5、算 87.0 総合『86.2』 中⇒国 77.7、数 77.2 英 78.1 総合『77.7』		達成基準はクリアした。さらに、通過率を上げるには、分析⇒個別対応・教員の熱意が不可欠である。 年度末実施のテストを参考に、各学年が弱点を明確にして、AIドリルを活用して個別対応していく。		○	
B 目標実現に向けた取組み									
新・継	アクションプラン	対象・実施教科	頻度・実施時期	具体的な取り組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認方法	達成目標 (=数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
<小学部>									
継続	朝学習や国語の授業	国語	火・木 始業前 15分	<ul style="list-style-type: none"> 教科書や教材を使いながら、音読指導を実施する。 AIドリルを適宜活用して個に応じた指導をする。 	音読発表会の実施。	12月の学習発表会までに、全員が強弱、抑揚をつけて音読する。	保護者に対し、12/10(1～4年) 11/12(56年)音読発表+歌の披露ができた。	国語の授業やパワーアップタイムの時間を活用して、音読の能力の向上が図られた。	○

継続	放課後補充教室	<ul style="list-style-type: none"> 算数に課題のある児童 コンテスト基準点未満児童 	週2、3回15分～30分 月行事予定に設定。	<ul style="list-style-type: none"> 算数に課題のある児童を対象に個別指導を実施する。 AIドリルを適宜活用して個に応じた指導をする。 コンテスト再テストの実施 	各担任による確認テストの実施 ・補習⇒再テストで検証する。	前年度の区のテストの目標値を達成させる。 ・再テストの合格達成率90%以上。	<ul style="list-style-type: none"> 学校だより、学年だよりで補充教室実施日を周知した。 算数を中心にできない部分の内容の指導をした。後半は、AIドリルの活用をした。 	<ul style="list-style-type: none"> 計画的な実施の目的には、共通理解・共通行動の意識が重要である。 定期考査や教科コンテストのために自主的に学習に取り組めるようになってきた。定期考査のテスト作成は、教員のスキルアップにもつながった。 	○
継続	サマースクール	算数 ・各学年約15～20名程度。	夏休み期間中の10日60分間	<ul style="list-style-type: none"> 算数のつまずきのある児童に対して、小集団指導を実施する。 中学生ボランティアを募り、個別指導を図る。 	算数の既習内容テストを再度実施して、定着度を検証する。	夏休み終了後の再テストで、80%を目指す。	・コロナ禍のため、8日間実施。	・AIドリル、足立区学力調査の復習システムや、東京ベーシックドリルを活用。中学生のボランティアの協力は、効果的であった。	○
継続	家庭学習	全児童	毎日	<ul style="list-style-type: none"> 学習内容の復習や自学自習できる課題を学年で検討し、課題を与える。 「AIドリル」の活用をして、自学自習の習慣化を図る。 	課題提出状況調査	児童の課題提出率100%を目指す。	・忘れる児童は固定化されている。	・家庭の協力が得られない場合は、かなり提出は難しくなり放課後残ってやらせることになった。	○
継続	ICT機器の活用	全児童	毎日	<ul style="list-style-type: none"> 授業でICT機器を活用し、視覚情報を効果的に提示することで、児童により分かりやすい指導をする。 	授業観察	全教員のICT機器の活用	・タブレットとデジタル教科書を併用しながらほぼ毎時間授業で活用している。	・より効果的な活用方法を全教員で共有していくことが重要である。	○

< 中学部 >									
継続	放課後補充教室	教科コンテストで基準点未満の生徒 週末課題未提出者 家庭学習ノート未提出者	15～30分程度、週2、3回実施。月行事予定に設定。	・コンテスト練習を2週間程度設定。基準点未満の生徒は、補充教室参加⇒再テスト ・週末課題等の未提出者は課題の完成を徹底する。 ・AIドリルを適宜活用して個に応じた指導をする。	・補習⇒再テストで検証する。 ・課題の確認。	・再テストの合格達成率 80%以上 ・課題提出率 100%を目指す	・全校体制で計画に沿って、放課後補充教室が実施できた。	・全学年共通で、各コンテスト練習期間を設定して、意識を高めた。 ・成績優秀者は学年だよりに掲載した。	○
継続	サマースクール	定期テスト等の目標値以下	夏休み期間中の7日間	・50分×2教科×2時間国語、英語、数学の基礎的な内容の定着を図る。 ・東京ベーシック、ワークシート、計算練習問題を活用する。 ・AIドリルを適宜活用して個に応じた指導をする。	・毎回プリントの採点をして返却し、自宅で復習させる。 ・確認テストを実施する。	・生徒の毎回の参加 ・復習内容確認	・7日間実施した。	・各学年5教科の実施。9年は、受験対策講座も実施。	○
継続	家庭学習	国語	毎週末	・新聞のコラムを読み、漢字練習、意味調べ、「感・想・思・考」の文章を書く。 ・一日1ページの自主学習を課題として出す。 ・「AIドリル」の活用をし自学自習の習慣化を図る。	・週始めに提出させる。 ・ノートを2冊用意し、毎週末交互に回収し点検する	提出率 100%	・生徒の意識が高く、ほぼ提出はできる。	・課題が生徒の関心が高いものなので、積極的に取り組んだ。学校だよりや校長通信にも掲載した。	○
継続	ICT機器の活用	全生徒	毎日	・授業でICT機器を活用し、視覚情報を効果的に提示する。	授業観察	全教員のICT機器の活用	・タブレットとデジタル教科書を併用しながらほぼ毎時間授業で活用している。	・より効果的な活用方法を全教員で共有していくことが重要である。	○

重点的な取組事項－２		不登校児童・生徒の減少			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
不登校、登校渋りの児童生徒の減少		<ul style="list-style-type: none"> ・不登校、登校渋りの減少 ・児童生徒への支援を徹底。 (SC 面接、ケース会議、別室登校、家庭訪問、面接・電話相談等) 	<ul style="list-style-type: none"> ・不登校・登校渋り（欠席30日以上）が小学校14名（1.2%）、中学校30名（5.4%）である。 SCやSSWとの連携を綿密に図り、組織的な対応を行ったが、コロナ禍の中、人数が増えてしまったと考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校とかかわりがもてない児童、生徒はいない。 ・SCとの連携だけでなく、担任の関りが重要である。さらに、特別支援教室担当の支援、別室登校の活用も重要である。 	△
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
QUの実施と活用	不登校、登校渋りの減少	<ul style="list-style-type: none"> ・QU分析を学年+専科・養護で実施する。 分析結果から対応方法を学年で共通理解⇒共通行動を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・Q-U結果に基づいて、学年・小学部専科・養護・カウンセラーと連携をとった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も、一人一人に目を配り、共通理解を大切にする。 	△
CSの教室通級児童生徒への対応方法を共通理解	年度当初の児童、生徒情報交換会の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・教員全体で対象児童、生徒の様子を共通理解して、対応方法の共通行動を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 年度当初、課題のある児童・生徒への対応について、全教員で共通理解を図る生活指導連絡会を実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒とのかかわり方や配慮の方法について、特別支援コーディネーターを中心に研修等を行い教員の指導力向上を図っていく。 	△

6 まとめ

(1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

ア学力向上アクションプランについて

1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

重点的な取組事項－1 基礎学力の定着（次学年の区のテストを1月末に実施したことをもとに）

- ・基礎的な内容が十分に定着していない児童、生徒が一定数いる。今後も、放課後補充教室の充実が必要である。
- ・小学部低学年～中学年は、繰り返しの指導、宿題・補習（A Iドリルの活用）を地道に継続することが大切である。
- ・高学年～中学部では、教科コンテストが基礎的内容の定着確認テストとなっている。基準点に到達しない場合の放課後補充教室での補習⇒再テストは有効である。個別対応のためのA Iドリルの活用も有効であった。
- ・小学部高学年からの定期考査実施は、児童の主体的学びにつながった。教員も質の高い教材研究をしながらのテスト作成をすることで、スキルアップが図られるとともに、自然発生的な小中連携も深まった。

重点的な取組事項－2 自己肯定感の向上と不登校の改善

- ・小中ごとに、生活指導連絡会をQ-U分析と活用、教育相談・発達障害のある児童・生徒への対応の共通理解⇒共通行動を図った。
- ・中学校体験やさくら学級・かがやき学級との交流を実施した。

(2) 保護者や地域へのメッセージ

- ・児童、生徒は落ち着いて学習に取り組んでいる。入学時から、基本的な生活習慣が比較的身に付いている児童が多く、様々な体験もしてきている。そのため、落ち着いて学習に取り組める児童が多い。そのよさを生かしつつ、基礎学力とともに思考力・判断力の育成をすることが必要である。素地はとても良いものがあるので、小中一貫教育校として教員集団の「共通行動」を心掛けながら児童・生徒の学力向上に今後も努めたい。
- ・中学生に加えて、小学5～6年生にも教科コンテストと定期考査を中学部と同一日に実施して、2年が過ぎた。児童の意識の向上が主体的な学びにつながっている。さらに、教員の意識改革とともに小中連携が図られることで、指導力の向上にもつながった。
- ・小中一貫教育校での学びの深まりが、学力の向上や不登校の改善につながるように、今後も教職員が「共通行動」を念頭に活動していく。
- ・来年度もさらに、国際コミュニケーション科の充実（2年生と国際高校生との交流、56年生徒と海外の子どもたちとのオンライン交流、6年生と9年生の英語でのコミュニケーション交流会、5～8年生のTGG体験等）を図る。

(3) その他（学校教育活動全般について）

- ・施設環境が特殊なこと・大規模であることが、小中一貫教育校の良い点を見えづらくしている点は否めない。そのような状況の中、第二校庭が完成し3年が経過した。現在では、小学部3～4年の体育と中学部の部活動で日々スムーズに活用している。心配されたバス移動も新たな問題等なく、充実した体育指導ができています。
- ・児童、生徒のもっている力は高いと感じる。学校サイドがさらに授業改善に努め、学力向上を目指していく。小学部高学年での定期考査・教科コンテストの導入は、大きな改革につながっている。小中一貫教育校での学びの深まりが、学力の向上や不登校の改善につながるように、教職員が「共通行動」を念頭に活動していく。